



題字…今山政三郎氏

発行所
新潟県小学校長会広報部
新潟市中央区幸西3-3-1
じょいあす新潟会館2階
TEL 025-290-2231
FAX 025-245-6060
E-mail: nkskgo@niigata-inet.or.jp
印刷所 株式会社 文久堂



新潟県小学校長会 副会長 塚田 賢

「コロナ禍における小学校長会」

前年度末・今年度初は、新型コロナウイルスの対応に迫られた。各学校の休校措置、感染の防止等にこれまで経験したことがない事態に翻弄させられた。校長会の会務運営にも、多大な影響を及ぼし、全国連合小学校長会（全連小）をはじめ各校長会において、年度の活動を方向付ける決議機関を開催することができず、書面審議等で会務を進めざるを得ない事態となった。

本県小学校長会でも、会議に参集できない状況を踏まえ、急ぎよインターネットを活用したタブレットによるオンライン会議を準備し、理事会や評議員会を開催する方法に切り替え、実施した。緊急事態宣言が解除された今日でも、平常時のように市校長会を開催するに至らない状況にある。

そんな中、五月二十六日全連小から新型コロナウイルス対応下の新たな活動方針が示され、「活動を止めること

なく、組織の総力をあげて調査・研究活動の充実に努めるとともに、積極的に施策の提言を進めていく」とした。

また、本県小学校長会からも、基本方針として「教育活動全般に関わること」と「県小学校長会に関わること」の大きく二点に整理された提案がなされ、第三回理事会及び第一回評議員会で示された。「難局に直面する今こそ研究と実践を止めることなく、全会員の総力を結集し、創意と活力にあふれた学校づくりに努める」と力強く述べられている。

全連小・研究協議会では、本年度の京都大会を紙上開催とし、来年度の石川大会は参加人数を従来の約半分にしておし、ソーシャルディスタンスを考慮した分科会運営等を再提案した。来年度の県小代議員会系魚川大会及び全県研究集会上越大会も、総力を結集してコロナ禍に対応した新しい大会運営を構築したい。（上越 大手町小学校）

令和二年度
第一回 県小評議員会（報告）

日時 六月十八日（木）十四時～十六時
会場 各任校等（オンライン会議形式）

一 開会の挨拶

吉田会長

世界的に遅れをとっている我が国の学校教育のデジタル化。社会的距離への適応さえ難しい学校環境。コロナ禍の中、質の高い教職員の献身的努力で支えられているのが日本の現状である。

今般の非常事態は、今までの慣例を見直し、新たなものを生み出す潮目・チャンスでもあり、県小学校長会がその先陣を切っていきたい。「新型コロナウイルス対応下での活動基本方針」も策定した。新たな時代に相応しい教育に向けて共に歩んでいこう。

二 議長選出 村上・岩船地区評議員

三 報告

・会務報告・全連小・関プロ関係

四 協議

(一) 各部の事業計画について

(1) 対策部

「市町村における教育関連予算」に関して、プログラミング教育や働き方改革等、時宜にあった調査項目を加えて実施する。

(2) 福利部

校長給与等の実態調査や退職後の再就職状況等を調査し、給与水準の

維持向上・雇用促進等に生かす。また、福利厚生関係団体との連携を深め、事業の充実を図る。

(3) 研修部

学習指導要領の理念を実現し、地域の信頼を得る創造的な学校経営を展開するために、コロナ禍の現状を踏まえつつ、郡市校長会単位の研究会を開催する。各自作成のレポートを基にした協議を基本とし、隣接校長会の合同開催など、各地区の実情に合った研究会とする。

(4) 広報部

会員の連携と学校経営の改善・充実に資するよう、当会の活動や当面の課題に関する情報を提供する。

(二) 令和二年度関プロ茨城大会・全連小京都大会、令和三年度関プロ栃木大会・全連小石川大会

五 連絡

(三) 令和二年度「要望書」
・日本教育会新潟県支部理事会・評議員会 七月四日（土）じょいあす

・次年度代議員会 令和三年五月十二日（水）系魚川市民会館他

六 閉会の挨拶

塚田副会長



特別寄稿



酒の国、にいがた

麒麟山酒造株式会社 代表取締役社長

齋藤 俊太郎

全国の日本酒の出荷量がピークを迎えたのが一九七三年（昭和四十八年）のこと。当時は九八〇万石（一七六万KL）の出荷量があり、二千を超える酒蔵が全国にはありました。その後は全国の出荷量は縮小傾向に転じましたが、逆に新潟産は増加傾向に転じ、一九九六年（平成八年）まで県内外への出荷を増やし続けました。

その当時、新潟県のお酒は「淡麗辛口」と評され、すっきりとした飲み口が様々な食事を引き立てると言われました。日本の食文化に西洋料理のみならず、世界の料理が広がり始めた時です。変わり始めた日本人の食事に、新潟清酒は、その相性の良さが認められたようです。時を同じくして、越乃寒梅に代表されるいくつもの銘柄が全国的に人気となり、これらの銘柄も新潟清酒全体を力強く牽引して行きました。出荷量が伸び始めた頃、新潟の清酒業界は特に酒造技術の向上に積極的に取り組みました。その一つが新潟清酒研究会です。その当時までは、蔵人のトップである杜氏が年に数回地域ごとに集まり、情報交換をすることはありましたが、各蔵の技術者が企業の枠を超え、横断的に日本酒を研究する場は

ありませんでした。そこでできたのが、新潟清酒研究会です。そもそも、酒蔵が持つノウハウや技術は、その蔵特有のものであり、他の蔵に公開するものではありませんでした。しかし、日本酒のブランディングは、個々の酒蔵の評価ばかりでなく、新潟という地域全体が評価されなければならぬという機運の高まりからこの組織が発足し、各蔵の技術者は課題を持ち寄り、業界全体で課題解決に取り組み出しました。また、その頃まで主流だった杜氏制度が徐々に衰退して行く中、酒造りの後継者を育てることが、業界として大きな課題となってきました。

そこで、若手技術者の教育機関である新潟清酒学校を設立しました。各酒蔵の推薦を受けて入学した社員たち（毎年二十名前後）に対して、ここでも企業の垣根を越え、各酒蔵のベテラン技術者たちが講師を務め、日本酒製造の基礎知識を机上や現場研修を通して教えます。酒造り以外にも、社会人として必要な文章の書き方や、技術者ではあってもマーケティングについてなどを協力をいただいている外部講師から学びます。

もう一つ、新潟の大きな武器として

新潟県醸造試験場があります。ここでは日本酒の製造技術だけに絞った専門研究が行われており、県内全ての酒蔵が指導を受けています。このような専門機関を持つのは国内では新潟県だけであり、新潟清酒が高い評価を受けてきたのも、この機関があつてのことでした。

企業間の技術的交流の場である新潟清酒研究会、若い技術者の養成機関である新潟清酒学校、そして先進酒造技術の研究と技術者に対する指導機関である新潟県醸造試験場。全国的に出荷量が減る中でも、新潟は数字を伸ばし続け、現在では全国三位の出荷量を誇るまでになった背景には、この三機関の存在はとても意味があつたと感じています。

技術的な取組と共に、高品質な新潟清酒を知っていただくためのPR活動も様々な行われてきました。その代表的な取組が「にいがた酒の陣」です。新潟県酒造組合の設立五十周年を記念して、二〇〇四年から始まった酒の陣。県下の蔵元が大集合する会場で、その蔵元が持ち寄った多彩な日本酒を存分に楽しんでいただく。また、酒造りの苦労話やお酒の特徴などを酒蔵の杜氏たちが直接お客様に伝えることで、造り手の思いを共有してもらう。そんな思いで十七年間開催して参りました。初回の来場者は四万九〇〇〇人でしたが、二〇一九年の来場者は過去最高の一四万一〇〇〇人に達しました。内訳は県内のお客様が55%、県外が45%です。初年度は県内が92%、県外が8%でしたので、広く県外のお客様にも知って

いただく素晴らしいイベントに発展したと思っています。しかしながら、今年の三月はコロナの影響で開催中止を余儀なくされました。今後、私たちの生活にこのウィルスがどのような影響を与えるのかは未知数ですが、酒の陣については昨年までの開催方法を大きく見直さない限り、開催が難しいと考えています。苦難の時ではありますが、これからも良質な新潟清酒を一人でも多くの方に知っていただけるよう、「にいがた酒の陣」も生まれ変わらなければなりません。

最後に紹介したいのが日本酒学会です。二〇一八年、新潟県酒造組合は新潟大学と提携を結び、総合大学という立場から様々な学問の視線で日本酒を学ぶ日本酒学センターを創設しました。酒造りを学ぶ学部をもつ大学はすでに国内にはありますが、医学、農学、法学、経済学などの分野から日本酒を掘り下げる大学はありません。いづれ新潟大学に日本酒学部が創設され、日本国内だけでなく、日本酒を学ぶ為に海外からもこの新潟に学生が集まってくるようになれば、どんなに素晴らしいことでしょうか。お酒造りをする人づくりから取り組むことで、私たちはこれからも最高の日本酒をこの新潟から提供し続けて参りたいと思います。



新潟淡麗
にいがた
酒の陣
niigata sakenojin



加茂の桐箆筒

昔は棹をさして運んでいた箆筒

一 加茂市の工業と桐箆筒

加茂市は新潟県のほぼ中央に位置し、古くから北越の小京都と言われてきた。県下でもまれな複合産業が集積し、木工、繊維、電気器具、機械、金属、皮革製品等の産業が有名であり、「桐箆筒」と言えば加茂と言われるほど、その技術と品質は、全国的に高い評価を受けている。

二 箆筒づくりが栄えてきた背景

郷土民謡「加茂松坂」に、「加茂は機（ハタ）どこ、箆筒（ダンス）の出どこ、箴（オサ）と槌（ツチ）とが呼びかわす」と歌い継がれてきたように、昔から「箆筒のまち」、「織物のまち」として栄えてきた。

三方を緑の山で囲まれ、その一方の粟ヶ岳から流れる加茂川が市街地を縦貫して信濃川に注ぎ、河船の往来が盛んで、山から切り出す材木の集積場となった。また古くから天然桐が豊富で容易に手に入り、保管・保存用の箱物（中には衣類、医薬品、書・骨董）が指物師によって作られ始めたのがきっかけであった。

三 加茂桐箆筒の歴史

今から二二〇年ほど前の天明年間に

加茂で初めて箆筒が作られたと言われている。「丸屋小右衛門」が大工の傍ら桐材で作ったと伝えられており、裏板に、「文化十一年（一八一四年）購入」と記された桐箆筒が市内の旧家に現存している。

四 その後の活況

その後の文政三年（一八二〇年）頃には、桐箱や桐箆筒類が船積みされ、加茂川、信濃川を通り、県内各地や東北方面に移出されたという記録がある。明治一〇年（一八七七年）に編集された『加茂町誌資料』には、「箆筒四〇〇棹、長持二〇〇棹、造出」とあり、また、その五年後には、北海道や東北六県へ出荷された記述があるなど、活況を呈していたことが伺える。

昭和五一年（一九七六年）には、加茂桐箆筒の持つ優れた特性、絹のように艶やかで美しい木目、木肌のぬくもり、強さとやさしい風合い、手作業による高い技術等が認められ、通商産業大臣から「伝統的工芸品」の指定を受けた。そのことが契機となり、加茂桐箆筒の名前は一気に全国区となった。

五 「加茂産地」と他産地の比較

現在、日本全国の約70%の桐箆筒

が加茂で作られている。加茂周辺の氣候が年間を通じて雨期・雨量等が桐材の渋抜き乾燥（板干し）に最適だと言われている。また、他産地と違い、「造材から乾燥」まで一貫して工場が手当するので、皮剥きをして変色を防ぎ、渋抜きで材料の伸縮を防ぐことができる。日本各地に桐箆筒の産地があるが、原木から製材する工場が集まるのは加茂市だけである。昭和四五年（一九七〇年）、須田工業団地を完成させ、桐箆筒の工場の多くはここに集まっている。

六 桐箆筒の特徴

桐箆筒の特徴は、「衣類を湿気や害虫から守り、水害や火災にも強い」という点にある。原木の桐から作られる板は軽くて柔らかく、気密性が高いため隙間のない箆筒を製作するのに適している。

桐箆筒の二つの逸話を紹介する。一つめは火事にあっても、桐箆筒の中のものは無事だったということである。実際に燃焼実験をした際にも、桐箆筒



引き出し前板の仕込み

の表面は焦げていても中は燃えていないことが分かった。木材の中でも熱伝導率が低い桐ならではの特性か



気品と機能を兼ね備えた加茂桐箆筒

らである。二つめは、水害で桐箆筒が流された際、水が引いた後乾燥させてから開けてみると泥水は全く入っておらず中の衣類は守られていたという話である。湿気（水）に強く、高い気密性をもっていることが分かる。

七 最後に

桐箆筒の産地は、結城、春日部、大阪、和歌山と各地に点在しているが、どこの産地も大都市に隣接している。今では産地から消費地に変貌している。そこでは、後継者や技術者の養成も盛んにはならなかった。その一方、加茂の乾燥場・工場等の用地は広大であり、県内外の若手従業者の導入の途も開拓しつつある。原料確保も植栽奨励、中国桐材確保のための桐材輸入業者の設立、共同仕入れ等を活発化させている。また近年では、海外（パリ）での見本市も行った。

これらのことから、日本独自の桐箆筒を将来も発展させ、技術を継承していけるのは、「加茂産地」だけだと言えるのではないだろうか。

参考文献

『加茂桐箆筒』加茂箆筒共同組合 発行
(加茂市立石川小学校)

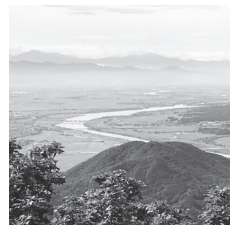
郡市だより

各人の力を高めつつ、
組織力で課題解決を目指す

燕・西蒲小学校長会

燕市・弥彦村の近くには大河津分水が流れている。再来年「通水百周年」を迎えるとのこと。当時東洋一の大工事と言われ、人々の不屈の努力で完成した分水により、かつて暴れ川だった信濃川は鎮まり、越後平野は広く潤され、燕市・弥彦村の発展の大きな礎ともなった。また、最近当地は、『下町ロケット』の大規模ロケが行われ話題となった。「答えのない問いはない」と、失敗にめげず努力し続ける技術者魂に、心熱くしたことは記憶に新しい。

修や相互連携を図る「この二つの目的を実現するため、精力的に活動を行っている。」



二 資質、能力を高める研修活動

校長の資質、能力の向上のため、継続的に「危機管理研修」を行っている。内容は、「不登校児童への対応」「食物アレルギー事故等の防止・対応について」「スズメバチへの対応」「新採用教員を窓口にした、誰でも働きやすい職場づくり」「虐待が疑われる児童の対応」「誤表記を防止する通知表作成マニユアルづくり」等実に多岐にわたる。共通するのは、いずれも各校で実際に起こった事実、取り組みの事例が扱われること。こうした具体的な内容を共有することで、校長としての資質、能力の向上を図っている。今年度は、七回の研修を予定している。

一 活動の目的

今年度は、二つの目的を掲げている。「県・郡市小学校の教育課題の解決に向けた組織的な活動を行う」「校長としての資質、能力の向上を目指す」

学校紹介

世界に近い学校
「文武両道」

の妙高高原南小

妙高市立妙高高原南小学校

一 特色はスキー活動

「越後信濃の国ぞかい」の歌詞から始まる校歌（作詞 堀口大学）の通り、長野県との県境に位置する当校は、全校児童六十六名の小規模ながら創立百四十八年の伝統を有する学校である。

学校の特色は、冬季のスキー活動にある。これまでオリンピックやワールドカップ等、世界で活躍するスキー選手を数多く輩出してきた。子どもたちは、スキーに携わる大勢の人たちへの感謝の気持ちをもち、元気に明るくひたむきにスキー活動に取り組んでいる。学校では、子どもの夢や願い、そして地域の期待を受け止め、地域のジュニア育成会やスキー学校、保護者と連携して、持続可能な指導体制づくりにも着手している。

二 目指すは「文武両道」

しかし、スキーだけでは、未来を拓き、世界で活躍することは期待できない。強靱な精神力や問題解決力、コミュニケーション能力等の資質・能力を一層発揮していくことも重要である。

当校が掲げている合言葉は、「文武両道の高原南の子」。たくましい心と体、そして確かな学力のバランスのとれた成長を目指している。様々な場や形態、手法での学習指導にも力を注ぎ、

確かな成果を挙げている。

校内研修では「互いに表現し合い、学びを深める」をテーマに、資質・能力の育成を目指した授業改善に取り組んでいる。また、子どもの理解度に合わせてプリント学習に取り組む「学びっ子タイム」（年間六回）、地域人材を活用した放課後学習支援「学びの広場」（年間三十回）を実施し、個に応じた支援の強化による学習内容の定着を図っている。



三 Who is next?

当校で培った文武両道の精神により、子どもたちが将来、様々な分野で世界を舞台に活躍することを願っている。ユーチューバーの先駆者HICKAKIN（ヒカキン）さんは、当校の卒業生。少年時代はジャンプの選手であった。

県小学校長会
HPへアクセス学校経営に役立つ
情報満載